

氏名(本籍)	あさ おか まさ お 朝 岡 正 雄 (茨城県)		
学位の種類	博 士 (体育科学)		
学位記番号	博 乙 第 1,443 号		
学位授与年月日	平 成 10 年 7 月 24 日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
学位論文題目	ドイツ語圏のスポーツ運動学をめぐる科学論争の展開に関する研究		
主査	筑波大学教授	教育学博士	片岡 暁夫
副査	筑波大学教授	医学博士	高松 薫
副査	筑波大学助教授	教育学博士	阿江 通良
副査	筑波大学教授	博士(教育学)	大高 泉

論文の内容の要旨

1. 論文の構成

本論文は、序論、本論 第Ⅰ部 第1章～3章、第Ⅱ部 第1章～第2章、結論から成り、本文246ページ(脚注を含む)、文献目録24ページ、合計270ページ(1ページあたり1200字。400字詰原稿用紙で810枚に相当する)となっている。

2. 論文の内容

本論文の研究目的は、ドイツ語圏における「スポーツ運動学」に焦点を当てて、この研究領域ではどのようなメタ理論に基づいて全体を構成した場合に、多領域にわたる個別的研究をひとつの統合理論としてまとめることができるのかを検討することにある。

このために、本論の第Ⅰ部では、ドイツ語圏におけるスポーツ運動学の発生から現在にいたるまでの展開が科学論の立場から通史的に検討された。

すなわち、第Ⅰ部の第1章では、まずはじめに第1節において、18世紀以降になって主として自然科学の研究者たちによって行われた人間の運動に関する研究の動向がまとめられ、第2節では、後にスポーツ運動学の発展に決定的なインパクトを与えた、いわゆる「人間学的運動理論」の動向が示され、さらに第3節において、これらの科学的運動理論とは対照的に、運動指導を職業とする人たち自身によって構築された運動理論の発展動向がまとめられた。続いて、第2章の第1節では、マイネルの著書と論文の考察を通して、マイネル『運動学』の基本理念とその矛盾点が明らかにされ、第2節では、60年代半ば以降から70年代半ばにかけて発表された運動学関係の諸論文の考察を通して、この時期のスポーツ科学における自然科学的運動研究の発展が概観され、さらに第3節では、これにともなって生じたスポーツ運動学の自然科学への傾斜の過程と、運動学を「横断科学」として統合しようとする構想の概略が示された。さらに、第3章では、第1節において、「自然科学」と「人間科学」の方法の違いが明らかにされ、第2節では、70年代以降の「スポーツ科学論」に関する文献の考察に基づいて、「学際科学」に内在する統合の問題が明らかにされ、続いて第3節では、統合の問題に関わって80年代以降になって主としてドイツ語圏において提案されるようになった「実践的応用理論としてのスポーツ運動学」の構想が詳細に検討され、その問題点が明らかにされた。

これに加えて、さらに第Ⅱ部では、スポーツ科学の運動研究において今日なお未解決のままに放置されている実践上の諸問題が提示された。

すなわち、第Ⅱ部の第1章では、第1節において、複合的能力とみなされる「スポーツ達成力」の構造が明示

され、第2節と第3節では、それを構成している「体力」と「技術」という2つの要素をとり上げて、それらをトレーニングを通して高めようとする際に生じるさまざまな具体的な問題が提起された。これによって、この章では、「スポーツ達成力」という全人的な能力を、それを構成しているいくつかの下位能力へと分解し、その後でそれらの個々の下位能力を高め、高められたこれらの個々の下位能力を再び総合することによってもとの複合的な達成力を高めようとする、いわゆる「構成的アプローチ」の問題性が明らかにされたのである。さらに第2章の第1節では、人間の身体存在の両義性という視点から狭義の運動学習の構造を明らかにすることによって、運動学習の教育学的価値が論じられ、第2節では、運動の習得と形成の問題を、さらに第3節では、運動学習の位相構造を取り上げることによって、人間の場合の運動学習の特異性が明らかにされた。続いて第4節では、運動を指導するために指導者に要求される前提的諸条件がまとめられ、最後の第5節では、実際の学習場面において指導者が学習者に働きかけて運動を身につけさせるための具体的な方法が提示された。すなわち第Ⅱ部では、「スポーツ達成力の向上」と「動きの修正・指導」というスポーツ運動学の中核的研究課題に関わって、スポーツ科学の運動研究において今日なお未解決のままに放置されている諸問題を提示することによって、スポーツ運動学の今日的課題が明示されたのである。

これに続いて、最後の結論の(1)では、本論の第Ⅰ部の考察をまとめる形で、今日のドイツ語圏ではマイネルが「モルフォロジーの考察法」に担わせようとした統合という視点が完全に見失われてしまい、実践場面の問題解決に向かって個別諸科学の研究成果をどのように統合すべきかを提示できないという閉塞状況に陥ってしまっているということが明らかにされた。続いて(2)では、今日のドイツ語圏において、マイネルの「モルフォロジー的考察法」が彼の意図とはまったく違った形で理解されてしまっているという現状とその原因が示され、さらに(3)では、マイネルが彼の「モルフォロジー的考察法」の拠り所としたボイテンデイクの「運動モルフォロジー」の研究対象と研究法の概略がまとめられた。そして最後の(4)では、スポーツ運動学でとり上げられる個々の研究対象が「スポーツ達成力」全体のどの部分に位置しているのかを明らかにすることによって、個々の研究成果を「スポーツ達成力」の獲得もしくは向上というスポーツ実践の中核目標の達成に向かって相互補填の関係に位置づけることができるということが示され、さらにスポーツ運動学を達成している個別諸科学の研究成果の実践性を保証するには、運動者の主観的体験内容を相互主観的に了解可能な概念へと収斂させることを目指す「モルフォロジー的考察法」を用いて、研究の出発点では、スポーツ実践の中から解決が迫られている研究課題を抽出することが、研究の最終段階では、個々の研究成果を現場で用いられている全体性的一直観的な言葉に翻訳することが不可欠であるということが明らかにされた。すなわち、結論の(4)では、今日のドイツ語圏におけるスポーツ運動学に内在する統合理論としての限界を打破して新しい統合理論を構築するための展望が示されたのである。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は第一に、ドイツ語圏におけるスポーツ運動をめぐる科学論争を膨大な資料を整理し、通史的にその展開を明らかにしたところに意義を認める。そして、第一の成果に基づき、第二に、現今のスポーツ科学の運動研究において未解決のままに放置されざるを得ない実践上の諸問題を明らかにし、モルフォロジー的な諸科学の統合の実践的必然性を明らかにしたところに意義がある。今後スポーツ的達成の実践の場で具体的な成果を積み重ねるとともにスポーツ達成力の向上以外にも検討の視野を広げてゆくことが期待される。

よって、著者は博士(体育科学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。